

## 「いっぽいっぽ」 沖縄市立沖縄東中学校3年 田畑 智次

「冬にはまだ早い、秋の香りがただようある日のこと、ふたごの赤ちゃんくまは生まれました。名前は「しゅうちゃん」と「ともくん」おかあさんもたっくんも森のみんなも大喜び。歌ったり踊ったり抱き合って喜びました。しゅうちゃんも、ともくんもにこにこうれしそうです。」これは「いっぽいっぽ」という絵本の最初の部分です。

「いっぽいっぽ」との出会いが、僕の人生を大きく変えることになったのです。

僕は生まれた時から足が不自由で、他の人と同じように歩くのは困難です。運動会ではハンデをもらって競技をしたし、宿泊学習では山登りに行けませんでした。だから行事の後、その話題で盛りあがっている友達の輪にあまり入ることができず、つらい思いをしました。なんでこんな足で生まれたんだろう。

何十人、いや何百人という確立で起こるであろう障がいがあると自分なんだろう。そんな事を考えれば考えるほど、どんどん自分自身が嫌になったし、「なんでこんな足になったの」と母に文句を言ったりもしました。

そんな時に僕が出会ったのが、「いっぽいっぽ」の絵本でした。実はこの本の作者は僕の母です。

始めに母から、この本を書くとき相談された時、最初は自分の事を書かれて、しかも多くの人達が見ると思うと嫌でした。でも、他の人に足の事を聞かれて説明するのも嫌だったので、「本があれば、いちいち説明する事はないだろう。」というぐらいの軽い気持ちで、最後は母が本を書く事をオーケーしました。

しかし、しばらくしてできた本を見た時、僕は大きなショックを受けました。

ずっと障がいが残ると知った時、後悔とざんげの気持ちで自分を責めながら、まだ言葉の通じない僕たちに心で謝り続けたという母の告白。「泣いてどうする。泣きたいのはこの子達だ。私が頑張らねば」と思ってこれまで僕達に接してきた事。本のあと書きには、僕の知らなかった母の一面がありました。そして、たくさんの母の思いや願い、愛情が一冊の本に詰め込まれていました。

本を通して母の思いを知った時、母に文句を言ったり、自分自身の事をマイナスに考えてしまった過去の自分に心が痛くなりました。そして同時に起きてしまった事をふりかえって嘆いたり、文句を言ったりするのではなくしっかりと前を向き、次の事を考え、進んでいくことの大切さに気づくことができました。

それからは、何事にもポジティブに考えるように行動しました。足が悪いからできないとか、やらないんじゃないかと、できる事をせいっぱいやる事の大切さをしり、考え方一つでそれまでと違い、いろいろな事が充実してきました。

僕は家族の、母の支えがあったからこそ今があります。言葉だけでなく、関わってきてくれた全ての事が生きていくための支えになっています。

人は困難があっても誰かの支えで乗り越えることができます。だから僕自身も、誰かが困難な時には手をさしのべ、それを乗り越えていけるよう手助けをしていきたいです。

まず、人にめいわくをかけず、自分の事は自分でやる。そして自分もいろいろな事を楽しむことができるようになったら、今度は人のためにがんばれるようになりたいです。

母のおしえを僕の歩幅で、いっぽいっぽ歩んでいきたいです。